

Contents

○平成20年度北陸支部総会 特別講演報告

[「空間と構造」-私にとっての構造デザイン](#) 講師：斎藤 公男（日本建築学会会長）

○若手優秀プレゼンテーション賞 受賞にあたって

環境 [春本 雄一](#) [都丸 恵理](#) [森原 崇](#)
計画 [多米 淑人](#) [馬場 麻衣](#)
構造・材料 [畠中 隆一](#)
建築作品 [望月 翔太](#)

○北陸建築文化賞 受賞にあたって

[北日本新聞 創造の森『越中座』](#)
[金沢ライトアッププロジェクト 月見光路](#)
[妙高市立新井南小学校ひまわり保育園](#)
[開運堂あづみの菓遊庭](#)

○支所だより

新潟 [学生住民協働のまちづくりの実践 長岡栃尾表町の雁木作り](#)
富山 [アルミとガラスによるミニマルデザイン 竹平記念体育館前待合室](#)
石川 [建築系大学院教育に関わる諸課題](#)
長野 [蔵の町須坂をキャンパスに](#)
福井 [伝統的な建物を活用した街の活性化への取り組み](#)

○シリーズ

学生（新潟） [「子宮～他と繋がるための包まれる空間～」](#)
学生（石川） [「せんだいデザインリーグ2008への参加を通して」](#)
学生（福井） [「福井市下馬地区における本社ビル新築計画」](#)
いきいき街づくり（長野） [「歩いて楽しいまちづくり」を目指す社会実験](#)
かくれた建築（富山） [壊されようとしている高岡本丸会館本館](#)

○お知らせ

国際景観会議2008軽井沢（6月14～15日） [関連ニュース](#)

北陸支部大会（7月26～27日、会場：金沢工業大学）については[こちら](#)をご覧ください。

奨励研究の募集（〆切7月25日）については[こちら](#)をご覧ください。

講演会：[「都市づくりへの姿勢」](#)

講演者：安 昌寿（日建設計 代表取締役副社長）
日時：7月18日（金）15時開場 15時半開演
場所：信州大学工学部総合研究棟1階大会議室

建築学会北陸支部活動：「[親と子の都市と建築講座](#)」（石川）

日時： 8月10日（日）10：00～16：00

場所： 石川高専

内容： 「照明器具をつくろう」

建築学会北陸支部活動：「[親と子の都市と建築講座](#)」（新潟）

日程： 第1回：10月5日（日）、 第2回：11月9日（日）、 第3回：11月30日（日）

詳しくは[こちら](#)をご覧ください。

書籍情報

・「[建築製図](#)」、著者：富永謙・二瓶博厚・遠藤勝勲・坂田充弘・丸谷芳正(2008/05発売)

賛助会員を募集しております。詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。

(社)日本建築学会 北陸支部

〒920-0863 石川県金沢市玉川町15番1号 パークサイドビル3F

Tel,Fax:076-220-5566 E-mail:ajj-h@p2222.nsk.ne.jp

(平成20年7月11日発行)

「空間と構造」－私にとっての構造デザイン

講師：齋藤 公男（日本建築学会会長、日本大学教授）

日時：2008年5月17日（土）15:00～16:30

場所：富山県民会館特別会議室304号室

報告：秋月有紀（富山大学）

日本建築学会会長の齋藤公男先生による特別講演が、北陸支部総会後に富山県民会館特別会議室で行われた。参加者は建築学会員や建築士協会員だけでなく、学生や一般の方などを含め、約150人と盛会であった。

講演に先立ち、齋藤先生の著書「空間 構造 物語」の紹介があり、会場には現物が数冊回覧された。出版にあたり先生が特に配慮された点として、①数式を記載しない、②ビジュアルを重視しオールカラーで写真を多用する、③価格をできるだけ抑え学生にも手が届きやすい本にするを上げられており、構造をこれから勉強する学生が興味を持つような工夫が随所に見られる著書であり、構造を専門としない人にとっても書棚に置かれるのをお勧めする一冊である。

講演では、建築における芸術と科学技術のベクトル、恩師を含む数々の知との出会い、そして構造のデザインの進化について紹介された。恩師坪井善勝先生から学んだこととして、桜門春秋2006秋季号からの引用されていたものを次に紹介する。坪井先生は「人生は美しくないけれどもならない」との持論を、齋藤先生を初めとする研究室の学生へ徹底的に教育された。

「研究・教育・設計の環」がいつも結ばれているよう心がけること。

「建築のための構造」をめざすことが大切であり、研究のための研究に閉じこもらないこと。

「世界的視野」を失わず、自らを外の世界に投じる勇氣と実力を養うこと。

「美しさ」へのこだわりは、理論、研究の核であり、構造設計もそうあらねばならない。

「後進」に対して心を配ること。

坪井先生の元で研究された時に、国立代々木競技場の計画を通して、宇宙船地球号操縦マニュアルでも著名な建築家バックミンスター・フラワーとの交流が始まった。フラワーの語録の引用を紹介する。頭が平面思考のままでは立体を生み出せない、との考えに基づいて実習を通じて構造を理解させる授業スタイルを積極的に取り組まれているのは、フラワーの影響もあるようである。

We are all astronauts (われわれ全員は(宇宙船地球号の)乗組員だ)

Don't fight forces use them (力と闘うな、力を利用せよ)

Doing the most with the least (最小のエネルギーで最大の効果を)

Think global act local (地球規模で思考し、その地域で実践せよ)

Architecture out of laboratory (実験室から生まれる建築)



写真1：公演中の齋藤氏



写真2：総会後の懇親会で学生と談笑する齋藤氏



写真3：B D S 柏の柱(2007)

また、数多くの事例写真を用いながら、テンセグリック構造や張弦梁構造など数多くの構造デザインを紹介された。特に最近のB D S 柏の森の例は、東京ドームと同じ大空間に対して新しい構造技術を導入した興味深いものであった。最後に最近の建築学会での新たな取り組み「テクノロジーと建築デザインの融合・進化 Archi-Neering Design展2008」も紹介された。

斎藤先生は1.5時間もの長時間、熱心に講義して下さった。時間いっぱいになったため質疑応答の時間がとれなかったが、講演会後の懇親会では、先生を囲んで活発な意見交換がなされた。

「卒業研究の学会発表」

香本 雄一

(信州大学大学院工学系研究科社会開発工学専攻修士課程2年)

タイトル:

長野市における都市交通の現状と自転車利用実態の把握 <環境系>

近年、人と環境にやさしい交通手段として自転車を見直す動きが高まっている。長野県長野市も例外ではない。しかし、長野市では自転車利用実態が明らかになっておらず、今後の自転車利用促進に向けた基礎データが欠如している。そこで本研究では、交通量調査を行うことによって基礎データを取得した。また、交通シミュレーションソフト(WATSim)を用いて自転車交通量が自動車交通量に与える影響に関して検討した。なお、交通量調査地点の位置と名称は図1に示す。

その結果、自転車道(図2)は十分に利用されていることが分かった(図3 地点別の自転車及び自動車交通量調査結果(8:00~8:30))。また、橋梁部において、通勤ピーク時における交通渋滞が顕著であることが分かった。橋梁部端の歩道において、自転車利用者は少なかった(丹波島橋除く)。これは歩道の幅員の違い(自転車道に比べて狭い)が影響していると思われる。

本研究では、WATSimを用いた。WATSimは、アメリカのKLD社によって開発された汎用の広域交通マイクロシミュレーションソフトである。はじめに、交通流の再現性の検証を行った。交通量調査で得られた実測値とシミュレーション上での出力結果を比較した。その結果シミュレーションにより、実際の交通量が高い精度で予測されることを確認した。図4に東鶴賀町と荒木の相関図を示す。交通シミュレーションの結果、自転車道と同じ位橋梁部において、自転車利用が進めば交通渋滞の解消にある程度効果があることが推測された。

受賞の感想

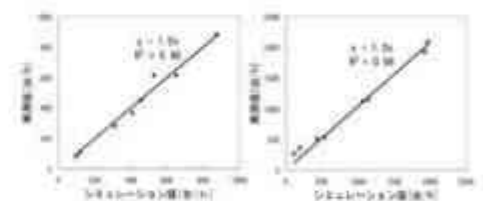
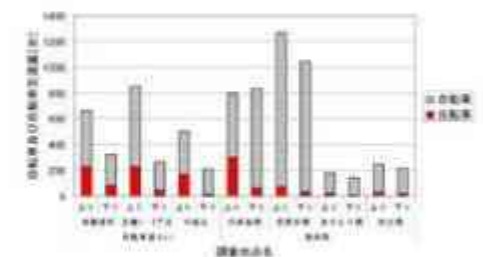
この度は、日本建築学会北陸支部大会若手プレゼンテーション賞を頂きまして大変うれしく思っております。私の大会における発表はこの大会(2007年)が初めてであり、非常に緊張していたことしか思い出せません。学外の研究者の方々に研究内容を見て頂く事は、まだまだ成長著しい修士生にとって、非常に貴重な経験であり、この経験が後の研究に役立ったことは言うまでもありません。また、就職活動において研究発表する機会があったのですが、この際学会での経験が生きました。本当にありがとうございました。

最後に、発表に際して工夫したことを述べたいと思います。

- ①顔を上げて大きな声で話す(原稿はなるべく使用しない)
- ②要点を簡潔に示す(長文にしない)
- ③図は大きく示す(詳細な説明は口頭で)



| 自転車・歩行者専用道路 | | 4.4 横谷交差点 |
|---------------------------|-------|-----------|
| 1 北横野通り(東横野駅、三輪1・27番、中横北) | 5 湯島橋 | |
| 2 瑞雲橋、真宝橋、松尾橋、あやとり橋 | 6 野山橋 | |
| 3 丹波島橋 | 7 野山橋 | |



④アニメーション機能を効果的に使用する(リズムが生まれる)

◆受賞にあたって

都丸 恵理

(新潟大学大学院自然科学研究科環境共生科学専攻博士前期課程)

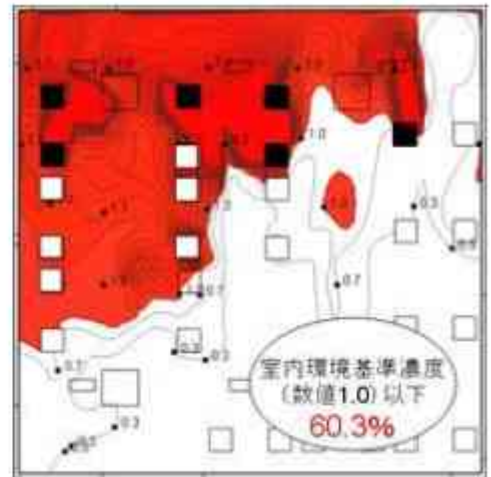
発表タイトル:

レストランにおける受動喫煙に関する基礎的研究 <環境系>

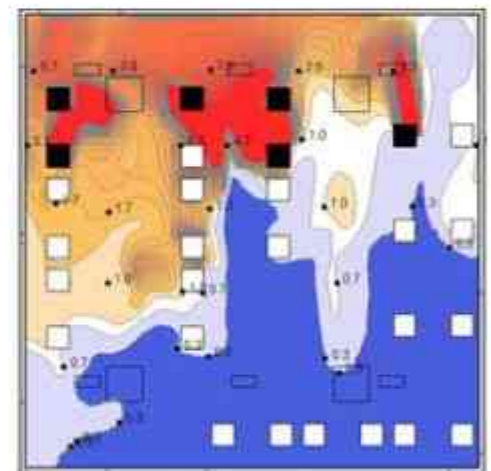
今回プレゼンテーション賞をいただいた研究は、日常で感じていたちょっとした居心地の悪さを解決したいという気持ちから始めたものでした。現在、タバコ煙の健康へのリスクは広く知られており、公共空間での禁煙化・分煙化が進んできています。しかし、分煙されているから非喫煙者にとって快適な環境かということ、そうでは無いことも多くあります。私はタバコが苦手なので禁煙席を利用するのですが、喫煙席から流れてくるタバコのにおいを感じる事がよくありました。そこで、従来粉塵濃度で評価されていたタバコの煙を臭気で評価することを考えました。研究には数値流体解析ソフトを用いました。ファミリーレストランをモデル化し、喫煙席、喫煙本数、換気回数を組み合わせた計30caseの室内の粉塵濃度及び臭気強度の分布状況を解析しました。そして、「粉塵濃度の室内環境基準を満たす配置であっても、臭気に関しては認知閾値濃度以上であることがほとんどであり、従来の粉塵濃度によるタバコ煙対策が臭気に関して良好な室内環境を実現するとは言い難い」という結論を得ました。

この研究結果を多くの人に分かりやすく伝えたいと思ったので、プレゼンテーションは、ぼうっと見ている人の気を引けるくらいインパクトのあるものにしたいという思いが強くありました。文字をなるべく使わず図で見せること、特に粉塵濃度や臭気強度分布の変化を絵で示したことが分かりやすさに繋がったのではないかと考えています。また、先生や先輩に何度も発表練習を見ていただき、改善すべき点を指摘してもらったことで、自分では気づかなかった分かりにくい部分を知ることができました。何度も発表練習を見てもらうことの良い点は、プレゼンテーションの完成度が上がるのと同時に、過度に緊張しなくなるということがあります。私は人前で緊張してしまうタイプなのですが、この練習のおかげで北陸支部大会ではリラックスして発表することができました。

今回このような名誉ある賞を受賞することができ、大変嬉しく思うと同時に更に頑張っていこうという励みになりました。今後は研究に取り組みながら、人に伝えるための努力もして行きたいと思います。



排気口側に喫煙席を配置
case 17



排気口側に喫煙席を配置
case 17

0 1 10 粉塵濃度(mg/m³)



◆発表の心構え

森原 崇
(石川高専)

発表タイトル：
PAC分析を用いた商店街の印象に関する研究 <環境系>

この度は、若手優秀プレゼンテーション賞を賜りまして、心から嬉しく思っています。

発表テーマはPAC分析を用いた商店街の印象に関する研究です。これは、多くの商店街が衰退・停滞しつつある状況下において、現状の利用者が商店街に抱いている印象を探ることによって、商店街の長所を見つけ出すとともに改善点を探ることを目的としています。PAC分析は評価対象の認知構造を探るための分析手法の一つであり、個々の認知構造を導きやすいという利点が被験者に自由な言葉で商店街の印象を表現してもらいたいという私の主旨と一致していたので適用しました。

実験は本校の学生14名を対象に実施し、活動性と雰囲気、見た目、機能性、経済性と客層という5つの軸で商店街の印象を捉えているという結果を得ることが出来ましたので、今後は実際の主な利用者である年代の方を対象に印象を探っていくことが課題です。

では、研究内容を発表する際に私が気をつけている点を2つ以下に記したいと思います。

学会の研究報告会では必ず時間制限があり、与えられる時間が短いほど発表も難しいです。決められた時間内に自分の一番言いたいことを聴衆の方に理解してもらえたらその発表は成功したといえるでしょう。そのためには、自分の発表内容を聴衆の方に理解してもらいたいという「気持ち」が大切だと私は考えています。私は初めての学会発表の時は非常に緊張していて「早く終わらないかな」とか「厳しい質問が来なければよいな」しか思いませんでした。それでは発表するという行為（ノルマ？）をこなすだけで、自分のためにはなりません。何十回と発表してきた今でも発表時は緊張しますが、発表の後に質問やコメントがないと自分の発表が悪かったと反省するようになりました。発表資料も聴衆の知識度に合わせて作成します。

もう1つ重要視していることは、「発表練習をする」ということです。できれば友人など聴衆の前で本番のように練習できればよいのですが、それができない場合は一人で見えない聴衆に話しかけるように練習します。本番に見立てて練習することで、自分の話すスピードを確認し、クリックのタイミングや言いにくい説明や言い回しなどがわかってきます。発表原稿は作成しますが、当日に読まなくても大丈夫なくらい練習しています。相手に伝える気持ちをもってたくさん練習すれば、本番ではきっと意義のある発表になることと私は思います。

6. まとめ

◆抽出された主要クラスター

活動性、雰囲気、見た目、機能性 + 経済性
客層

◆商店街のマイナス印象の改善

古い
狭い
暑い → 1) 店舗や通りの美化
2) アクセス方法の改善
3) 街路灯の設置
+α: 洋風歩道街の建設



◆若狭地方の神社の拝所

多米 淑人

(福井工業大学建設工学科建築学専攻)

タイトル:

福井県若狭地方の神社の拝所について

-(1)独立型拝所の建築形式-

<計画系>

今回若手プレゼンテーション賞を頂いた発表論文のタイトルは「福井県若狭地方の神社の拝所について-(1)独立型拝所の建築形式-」である。

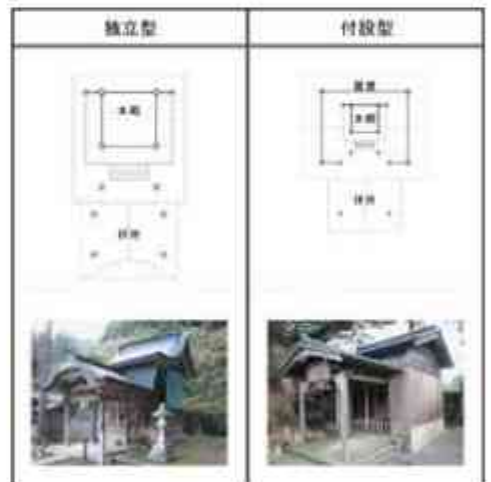
タイトルにある拝所とは、本殿の前にある社殿のことである。これは参拝者が礼拝するところで、古くは祝詞を奏上していた場所でもある。この拝所は福井県内でも越前地方にはほとんどみられず、若狭地方の神社建築の特徴の1つである。

拝所には、図1左側のように本殿の前に独立してたつものと、右側のように本殿が鎮座する覆屋から張り出してつくものがある。本研究では前者を独立型、後者を付設型と呼んでいる。この2型式の拝所は建築形式などに違いがみられ、独立型は総体的に装飾性が高く、細部形式なども整っていて建築的質が高く、付設型は比較的簡素な造りが多い傾向にある。受賞した論文ではこの2型式のうち特に、前者の独立型拝所について発表した。

受賞時の研究成果としては、規模が1間×1間、床が石敷あるいは土間、壁や建具などが無い四方吹き放しで、屋根は唐破風造または入母屋造とするものが、独立型拝所の典型的な建築形式であること(写真1)やこれらは出三斗、獅子や猿の木鼻、龍が施された鬘股など整った細部形式ももっていること(写真2)、若狭地方内でも分布状況に差がみられ、特に小浜市や若狭町がある中部及び東部で多くみられことなどを解明した。

発表はPowerPointを使って行い、文字や図版などを適時アニメーションとして表現した。これによって、限られた時間の中でも、研究成果を効果的に発表することができた。そして、写真や表を多用することや文字は簡潔かつ大きくすること、発声は大きな声でハッキリとゆっくりとすることなど、発表する上での基本的なことを最も心がけて行なった。

今回の受賞は、後の研究を進めていく上での励みとなり、現在も拝所に関する研究を続けている。その成果については本年度(平成20年度)の日本建築学会全国大会、支部大会で発表する予定である。



「原稿を見ずに前を向いて」

馬場麻衣

(福井大学大学院工学研究科ファイバー・アメニティ工学専攻博士後期課程)

タイトル:

賃貸住宅経営者組織の活動内容に関する調査研究

私は、「賃貸住宅経営者組織の活動内容に関する調査研究」と題して、修士論文の一部を発表しました。目的は以下のようなものでした。ライフスタイルの多様化など今後ますます賃貸住宅の役割が重要になっていく中、現状での賃貸住宅は持ち家に比べ、質的水準が大変劣っています。さらに、「賃貸経営者」といえば、その住宅そのものではなく、転売による利益が目的の場合が多く、なかなか新規でも良質な賃貸が供給されないことを危惧していました。そんな中、全国的な賃貸経営者組織に出会い、その会員の経営意向を調査する機会に恵まれました。そうすると、一番の課題は「空室対策」であり、部屋が埋まらないと金銭的に困るという問題はみなさんお持ちでしたが、それを日々の清掃活動や居住者に対する声掛け、おすそ分けなどを行うことによる、ソフト面での安心感を大切にしている経営者が存在しました。その結果、経営状況は良いとのことでした。さらに、経営者組織の活動も「空室対策」のセミナーや講演が多く、次いで「防犯対策」や「借家人とのトラブル対策」でした。

ここ、北陸は持ち家率が非常に高く、多くの人が“夢のマイホーム”を目標にしていると思います。しかし、これまでの研究の中でも、郊外の新興住宅にある大豪邸に老人が独りで暮らしていて、足も悪く、日々の買い物もままならないというような光景を目にしました。ただ家を持つだけでなく、年次経過とともに自分に似合った生活に変えて行くべきだと強く感じました。このように、たとえば老人が引っ越しても良いと思える賃貸住宅が市街地に増えることを望んでいます。

この賞に応募していたことも忘れたころに、受賞の知らせが届いたので、大変うれしかったことを覚えています。誰もが人前で話すのは緊張すると思います。これは何度も経験するしかないと思っています。また、限られた時間の中で自分の研究をより理解してもらえるように、私は原稿を作っていません。原稿があると、それにとらわれ抑揚がなくなりそうだからです。パワーポイントを準備しながら、そのページで伝えたいことをぶつぶつ独り言で言っています。そうすると、当日の流れで、機転を利かせ、長くなりすぎたときのまとめもスムーズにいくと思います。あとは、人の目を見て堂々と！とはいうものの、今までに完璧にできたことはありません。まだまだ経験が必要です。

◆若手プレゼンテーション賞 受賞にあたって

畠中 隆一
(福井工業大学)

タイトル：
鉄筋コンクリート造コア壁における壁板の偏心圧縮実験 <構造・材料系>

今回、若手プレゼンテーション賞を受賞した研究は、鉄筋コンクリート造コア壁における壁板の偏心圧縮実験 - 閉鎖型拘束筋における拘束領域及び偏心距離の影響 - である。

超高層建物において、コア部分をRC造連層耐震壁とした場合、地震時にコア壁に大きな軸力が作用する。このため、高軸力下におけるコア壁の靱性確保が必要であり、高圧縮領域コンクリートの圧縮靱性がコア壁の靱性を左右すると考えられる。そこで、高圧縮領域となるL形隅角部及びその近傍の壁板部分を模擬した部分試験体による偏心圧縮実験を行い、その結果、閉鎖型拘束筋を用いた場合の圧縮靱性に対する拘束領域と偏心距離の影響が明らかになった。以上が研究内容である。

本章の受賞にあたっては、受賞できるのはそれほど多くないと聞いていた事に加えて、今まで学生生活において何かの賞を受賞することがなかったので、より一層嬉しいという気持ちである。学生時代のよい思い出になったと思うが、それにとどまらず、今後の仕事のうえでも、おおいにプラスになると思う。

発表に関しては、発表用のパワーポイントを作成する段階から指導教員の先生と話し合いながら作成し、何回も練習を重ねる中で、効果的な表現方法、よりわかりやすい説明の仕方などを考えた。わかりやすい説明の仕方を考えるなかで、逆に研究内容の理解が深まったのではないかと思う。さらに、どんな質問が来てもしっかりと答えられるように、論文を見直したりしながら内容を改めて理解し、用意をした。この事が本賞の受賞につながったのではないかと思う。

現在は、研究とは直接は関係のない仕事をしているが、受賞による自信や発表に至るまでの過程は貴重な勉強であったと今でも思う。ひとつのことに打ち込み、その成果を他の人に伝えることはとても重要なことである。より多くの人に、より深く理解してもらうには、プレゼンテーションの工夫が不可欠であると思う。これから仕事をはじめ、さまざまな場面でプレゼンテーションを行うことがあると思うが、今回の、この経験を生かしていきたいと思う。



「卒業設計のプレゼンテーションを終えて」

望月翔太
(信州大学)

タイトル：
建築設計における「偶然性」の研究 <建築作品>

このたび「若手プレゼンテーション賞」という名誉な賞を頂きまして、非常に光栄に思います。この賞を受賞したことで、その後の自分のプレゼンテーションにさらに自信が持てるようになりました。また、この賞が就職活動での私の強みになったことは言うまでもありません。実際のプレゼンテーションでは、1つのシートでは1つの要素だけを説明し、なるべくビジュアルに力を入れて視覚で見ている人に訴えかけるようにしました。

私が提案したものは、「建築設計における「偶然性」の研究」という「偶然性」をテーマに行った卒業研究です。設計手法の段階で「偶然性」を空間構成的に適用させることで、計画的に作られている空間構成に変化を与えられるのではないかと思います。「偶然性」を秩序としてシステムティックに設計手法に適用させることを考えました。「偶然性」から多中心性、ゆらぎ、自然という3つの要素を抽出、それらを設計手法に適用し、「偶然性」の性質を内包する建築を表現しました。「偶然性」は、一見人的作用からかけ離れたものに思えますが、「偶然性」から派生した「ゆらぎ」は、人間の性質の随所に見ることができると面白みを感じます。「偶然性」の性質をもつ建築と、それを利用する「偶然性」から派生した「ゆらぎ」の性質を持つ人間とが影響しあうことでクリエイティブな空間が生まれることを期待しました。

敷地は神奈川県横浜市です。2009年に開港150周年を迎える横浜市は、音楽やアートの活性化に力を入れています。そこでそれに関連する施設としてアーティストのためのスタジオと一般の人向けの宿泊施設、アーティストの発表の場を有したアーティストコンプレックスを提案しました。アート作品、アーティスト、一般の人、観光客が、「偶然」から生まれたこの空間での交流により新しいものが生まれ、横浜市の活性化に繋がることを目指しました。

「若手プレゼンテーション賞」は今回でまだ2度目の試みのようですが、この賞がさらに名誉な賞に発展することで、北陸支部大会が今後さらに有意義なものになることを期待しております。



受賞(作品) : 北日本新聞 創造の森『越中座』
受賞者 : 米田 浩二 (鹿島建設(株)建築設計本部)

北日本新聞 創造の森『越中座』

文 : 米田 浩二 (鹿島建設(株)建築設計本部)

富山県の地方紙「北日本新聞」の新工場である。新工場は「環境と情報技術の共生をめざす、緑の中のITパーク」のコンセプトのもと、ゲストハウスやメディアプラザ、屋上ガーデン、芝生広場、ピオトープ空間を備え、地域に開かれた情報発信拠点としての役割も担っている。

敷地には、「生産エリア」、「事務・厚生エリア」、「ゲストエリア」の3つのエリアからなっている制作センターと、別棟で折込広告を扱うサービスセンターをトラックヤードを共有するかたちで配置している。敷地東側の雨水調整池は、季節を感じ取れる木々や水辺を整備したピオトープ空間とし、利用者に憩いの場を提供すると共に隣接する田島川の川沿いの修景として相応しい環境景観を形成している。

敷地西側には、将来用増築スペースを確保することで印刷業務を続けたままの輪転機更新に対応させて建屋の長寿命化を図っているが、増築時までは手入れの行き届いた芝生広場として「地域社会との交流の場」としての機能を与えている。

制作センターは、各エリアごとにボリュームの分節化を図り、巨大な「生産エリア」が敷地中央になるよう配置し、周辺のスケール感に溶け込むよう配慮している。外装も、要所に再生木や耐候性鋼板、天然石等を用いて緑に溶け込む素材感豊かな表情をもたせ、ITパークのコンセプトを具現化している。

「事務・厚生エリア」は、ピオトープ空間と田島川に対しリニアに配置し、立山連峰に向かって大きく開放することで明るく快適な環境を提供できる骨格を構築している。また、ガラス張りの大開口部には、深い庇と縦型電動ルーバーを設け、日射負荷の低減による温熱環境の向上と立山連峰の眺望確保の両立を図っている。ほかに、屋上の庭園化、風力発電・ソーラー発電による外灯等、見える「環境配慮設計」を随所に取り入れることで、次代を担う子供達へ「地球環境への配慮」がメッセージとして伝わることを意図した。

「ゲストエリア」では、『見せる工場・体感できる工場』として、1階に全面ガラス張りの見学者ホールを設置、また、見学者施設である3階メディアプラザへの直通動線となるエスカレーターからもガラス越しに生産エリアを望めるようにして、ふだん目にする事のない新聞制作プロセスの全体を把握できるようにしている。

設備では、「電源引き込みの二重化」+「自家発電機」、「機器の瞬停対策」+「サージ保護装置の設置」、生産エリアの「防潮対策」等、基幹工場として災害に対する万全の対応を施している。また、防災面では、全館避難安全検証法(ルートC)を採用し、安全性、経済性、及び開放的な吹き抜け空間の具現化等デザイン性を向上させている。



現在、新工場には毎日大勢の見学者が来館し、オープン後1年9ヶ月で9万人を突破した。また各種地域イベント開催の核施設としても有効に機能しており、富山県での社会的貢献度も多大である。

受賞（業績）：金沢ライトアッププロジェクト月見光路
受賞者：広坂振興会／金沢中心商店街まちづくり協議会／金沢工業大学月見光路プロジェクトチーム

「金沢ライトアッププロジェクト 月見光路」

文：西村 哲（金沢工業大学環境・建築学部建築系）

本プロジェクト「月見光路」は、広坂地区という金沢中心市街地において、①北陸の文化や景観と調和した夜間景観演出法を提示し、②新しい催事というかたちでの地域連携や市民参加を実現化させ、持続可能な地域活性化を目指したプロジェクトです。

本プロジェクトの実施地である広坂地区は、香林坊から兼六園をつなぐ百万石通りの南北方向に面したエリアです。このエリア内には、旧制四高跡である石川近代文学館、石川旧県庁本庁舎、金沢城址、辰巳用水、金沢市役所、金沢21世紀美術館があり、広坂地区は金沢の伝統文化、政治経済、芸術の拠点といえる希少な文化地区です。

一方2004年の石川県庁舎の移転を機に、地域住民が中心市街地に訪れる機会が数年々減少し、広坂地区の商店街では、夜間になると店を閉める店舗が多くなり、近隣の兼六園や金沢21世紀美術館の個性的な演出と賑わいとは相反する流れにあるという問題がありました。2004年度には、金沢市中心市街地活性化基本計画が策定され、基本方針には個性を生かしたまちづくり、元気な商店街に加えて都心ビジネスの形成もあげられています。

「月見光路」とは広坂振興会、金沢工業大学プロジェクトチーム（教職員7名、学生約120名）、金沢中心商店街まちづくり協議会が主催となつて、広坂地区の夜間景観の創出と中心市街地の活性化を目的とした地域連携型プロジェクトです。

プロジェクトの実施にあたって、金沢工大教職員および学生が広坂地区住民とディスカッションをして、地域の環境変化、ニーズ、将来像の理解に努め、広坂地区独自の夜間景観を立案しました。

デザインコンセプトは、月や星といった自然のあかりに惹かれて、訪れた人が広坂地区をそぞろ歩きできる“あかりのみち”であり、金沢の伝統文化にふさわしい庭、草木、山、星、雪吊り、竹をイメージした照明オブジェを作成しています。金沢中央公園から広坂緑地公園、金沢21世紀美術館までの動線と広坂商店街にオブジェを2000基以上配置し、金沢城址や美術館とも調和した夜景観を創出させています（写真1～4）。

開催時期は2006年7月29日（金澤夕暮れ祭りに月見光路イベントとして参画 写真5～6）と同年10月12～14日です。またプロジェクト後、店舗内照明を3種類デザインし、商店街のウィンドウディスプレイに協力する機会を得るなど、プロジェクトの波及効果も直実に現れています。月見光路は2004年～2007年まで継続して実施しています。2007年度には2006年度の実績を踏まえて、「月見宴」と題し、あかりに関するディスカッション、野外コンサートの催しと、オープンカフェを盛り込み、市民参加と集客効果を高める工夫がなされ、年々プロジェクトを成熟化させています。この



ことは、2006年度までの地域連携や実施体制がより確立したこと、一般市民の期待がより高まったことを意味しています。

今後も金沢独自の景観演出、持続発展する地域連携の取り組みを提案し、文化都市金沢の発展に寄与できるように努めていこうと考えています。



受賞(作品) : 妙高市立新井南小学校ひまわり保育園
受賞者 : 高橋 政志 (株式会社建築事務所)

「雪国の学校の作り方」

文 : 高橋 政志 (株式会社建築事務所)

豪雪地旧新井市の南部を統合する小学校と保育園で、統合後も小学校は各学年1クラス最大25名、全校で100名程度、保育園定員60名の小規模施設です。南北に水田の広がる気持ちの良い敷地は、南に向かって緩やかに上っており、南にある校庭は北側アプローチ道路より2mほど高くなっています。校庭よりさらに2mほど高い位置に配置した保育園、小学校の教室群、共用のランチルームなど主要なスペースのある2階は、4m積雪時も日照が確保できます。1階には職員駐車場、地域交流スペース、体育館、給食室を配置しました。

オープンシステムの普通教室群は、2学年毎にまとめ、それぞれ空間の造りを変えています。さらに、手を動かす作業主体のアトリエ、調理専用の調理室、体育館のステージと音楽「演奏」室を兼ねた創作ステージ、「鑑賞」利用を主体にパソコンも置かれるマルチメディア室、多目的利用を想定し囲炉裏も体験できる生活科室等の特別教室群は教科の枠を越えた活動を促す空間となっています。それらを体育館の吹抜を囲う形で配置し、100名足らずの小規模校に賑わいをもたせました。

その他、対を成す体育館と遊戯室の屋根、雁木をイメージしたテラス、地元産杉間伐材による木の内装、深夜電力利用の床暖房、地域ぐるみで製作した地域交流スペースの壁面、親子で製作した学習机等もこの学校を特徴づけています。

積雪処理の大変さと、雪に閉ざされた中での活動に対する人々の想いは雪国での設計経験豊富な私たちの想像をはるかに超えるものでした。本来中庭があって採光通風に寄与すべき中央部分に屋根をかけ、体育館や遊戯室に利用するという手法は、雪国だからこそ受け入れられたものだと思います。

暖かい室内に囲われて体育館は凍えることはなく、その天井の高さゆえに大雪の際も明るく、快適な活動空間を提供することができました。また、敷地の高低差から生じた地下ピット利用の通風経路を通して、夏には体育館、教室群別々に涼しい風が導かれます。

このようなこの学校の特性は、広さが十分にあって天井も十分に高く採光可能な体育館が中央に配置された事と、敷地に高低差がありたまたま通風経路が確保できた事、この2つの条件がそろって初めて実現可能となりました。

中庭に屋根をかけるのは、雪国だからこそ受け入れられた手法とは言うものの、これが体育館や遊戯室でなければ、かつて廃れたアメリカ型のオープンスクールの様になります。また天井に十分な高さがなければ、雪に埋もれて真っ暗になってしまいます。

雪国だからこそ安易にやってはいけない事でもあるのです。



南西より望む外観



地域交流スペースの校歌の歌詞(四季)を表すレリーフとメロディーを表すベンチ



小学校アリーナ



低学年ワークスペースより教室を見る



保育園遊戲室

学生住民協働のまちづくりの実践 長岡栃尾表町の雁木作り

岩佐 明彦

(新潟大学工学部建設学科)

すがすがしい5月の快晴の元、長岡市栃尾表町を見下ろす秋葉公園にい
くつもの人の輪ができ、住民と学生が名物の油揚げをおかずにおにぎりを頬
張る…。春の訪れと共に、今年も表町の雁木づくりがスタートした。

新潟大学建築学コース3年生による建築計画学演習（担当：西村伸也教
授・岩佐明彦准教授）は、長岡市（旧栃尾市）表町の住民と協働し、雁木
（各住戸から街路に供された屋根付きの歩行空間）を少しずつ建造していく
という「手作り」なまちづくり活動である。実際に雁木を作るようになって
9年、西谷川に沿って蛇行するように軒を連ねる町の各所に手作り雁木が見
られるようになった。

一年を通して行われる雁木作りの活動は、「町を知ること」、「提案す
ること」、「作ること」の3つの段階に分けられる。そしてこの活動の大き
な特徴は3つ目の「作ること」にある。夏に行われるデザイン提案のプレゼ
ンテーションと住民による投票を経て、優秀案を地元の工務店の協力を得て
実際に建造するのである。

この「作ること」が最終目標に提示されることが、参加する学生の大き
な原動力となっている。

毎週のように表町を訪れ、様々な住民と関わり、時には一泊お世話になり
ながら、自分たちのアイデアをまとめていく。最終プレゼン直前の製図室の
熱気は、卒業設計提出直前のそれを凌ぐほどである。

「自分の設計したものが実際に建つ」、このことが学生にとってどれだけの
魅力を放つものなのか、毎年ながら驚かされる。

8つのグループに分かれて取り組むこの演習で、最終的に雁木の建造に
辿り着けるのは、たった1グループ。実際の建築コンペ並みのハードルが待
ち構えている。勝ち抜いて雁木建設の栄光に辿り着くのはどのグループか？
栃尾表町の熱い夏が今年も訪れようとしている。



アルミによるミニマルストラクチャー 竹平記念体育館前待合室

貴志 雅樹／横山 天心（富山大学）
南井 英希（三協立山アルミ）

この待合室は、新しいアルミ構築物の開発を目的として協立山アルミと行った共同研究の成果である。以下内容をデザインコンセプトとテクノロジカルコンセプトに分けて纏めている。

デザインコンセプト（富山大学 貴志雅樹・横山天心）

1) アルミとガラスによるミニマルデザインの追究

- a) 建築の構造としては華奢な60mmのアルミの同じ型材を柱や壁、天井や屋根根とすることで、空間を最小限の部材で構成する。
- b) ガラスとシールとアルミ型材が同一面で納められることで、連続した門型フレームがもたらす精密で平滑な面性を保持する（フラットサーフェスの追究）。
- c) アルミパネルの接合部におけるスチールの受け材やボルト、さらに照明や配線まですべて60mmのアルミパネルに埋込むことで、単純で即物的な架構とする。

2) アルミニウム構築物が有する特性の活用

- a) 軽量であることから、運搬・組み立て・解体が容易である。
- b) 経年変化が少なく、リユースやリサイクルといった再利用が可能である。
- c) 構造材と仕上げ材を一体化して使用することが可能である。

3) 交通施設内の構築物に対する諸条件への配慮

- a) 駅のコンコースやホームなど大きな重機を持ち込むことが困難な場所においても、人力で簡単に建設できる。
- b) 移築、改築が短期間で簡易に行うことができる。
- c) メンテナンスを容易にする。

テクノロジカルコンセプト（三協立山アルミ 南井英希）

1) アルミによるミニマルストラクチャー

柱材と梁材は共通部材でアルミニウム合金製押し出し型材A6N01-T5を用いており、断面は外寸250mm×60mmの長方形である。柱梁の接合部及び柱脚はそれぞれ剛接合、剛支持とし、梁と柱3本からなる平面のラーメンフレームが4体連続し、その間にガラスが納まる構造となる。

また、構造短辺の柱上部にて、構造部材とは思えないくらい華奢なパイ



写真1 外観

写真2 内観



写真3 外観



写真4 柱と連結棒



写真5 外壁柱と梁



ブ材（直径20mm）により各ラーメンフレームを連結することで、各ラーメンの短辺方向のたわみを拘束し、天井ガラスの落下を防止している（写真4）。

2) アルミ剛接合の洗練

接合部は全て接合金物を介し、高力ボルトによる摩擦接合を用いて剛接合としている。柱梁接合部位の断面中空部の一辺を切り欠き、接合金物を挿入しボルト接合する（写真5、6）。柱と梁の断面は構造部と仕上げが一体となっており、ナットをあらかじめ回転止め部材に組み込み、金物に固定しておくことで、ボルトは全て形材のガラス呑み込み面から挿入、締め付けを行うことが可能となる。これにより、ボルト頭、ナットは完全に形材内部に納まることとなる。また、一方向からの施工となり、狭いスペースでのボルト配置となるが、施工性は損なわれない。ボルト締結後、切り欠き面は全てカバー材により覆われるため、施工後は接合部が露出せず、フラットな仕上がりとなる（写真7）。

写真6 内壁柱と梁



写真7 カバー装着した状態



建築系大学院教育に関わる諸課題

川崎 學史

(金沢工業大学 環境・建築学部准教授)

1. 全国的な大学院教育改革の動き

平成17年に文部科学省・中央教育審議会より「新時代の大学院教育 ―国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて―」が答申された。ここでは大学院教育の明確な目標設定が問われ、これに沿った教育プログラムおよび教育内容の再構築が求められる。大学院教育の実質化では、コースワークの充実・強化、円滑な博士の学位授与の促進、教員の教育・研究指導能力の向上、産業・地域等と連携した人材養成機能の強化などのキーワードが並んでいる。また国際的な通用性として、大学院評価の確立と質の確保、国際社会における貢献と競争などのキーワードがある。これを受けて大学院設置基準等の改正（平成19年4月1日施行）が行われ、平成19年度以降は、研究科・専攻ごとに人材養成に関する目的を学則等に定め、ファカルティ・デベロップメントの実施や成績評価基準の明示が義務づけられた。

2. 大学院教育改革支援プログラムの実施

平成17年度からは文部科学省「魅力ある大学院教育イニシアチブ」という大学院教育支援が実施され、大学院においても競争的環境のもとで教育改革に取り組む姿勢が求められるようになった。応募件数および採択件数はともに国立大学が大きな割合を占め、また採択されたプログラムのうち理工系が約9割という結果となっている。平成19年度からは「大学院教育支援プログラム」も実施されるようになり、平成20年度からは「魅力ある大学院教育イニシアチブ」を廃止しこれに一本化されている。

3. 建築士試験の受験資格要件

耐震偽装に端を発して、国土交通省のもと建築士受験資格要件の見直し（平成21年度入学者から適用）が行われている。ここでは従来の学科認定を取りやめ、指定科目（単位数規定も含む）の履修が学歴要件となるような変更が予定されている。また大学院教育に対する一律の実務認定が取りやめとなり、実務認定（1年もしくは2年）を得るためにはインターンシップなどの実践教育の実施が条件となってくる。さらに、建設業においても実務として認められる職種の制限が強まり、大学のみならず実社会への波紋も広がっている。

4. 国際建築家教育

UNESCO-UIA建築教育憲章では5年以上の建築教育プログラムが望まれており、中国や韓国といったアジア諸国もこれにあわせた教育プログラムの変更をすでに行なっている。これに対し、日本だけが学部+大学院の4+2年制度を継続しており、6年間教育プログラムの一貫性も保証できていない。そこで、日本建築学会では大学院JABEE認定を他の学協会に先駆けて実施し、将来的には学部JABEEと連動した6年一貫教育の認定を行っていく予定としている。

5. 結びにかえて

少子高齢化、偽装、国際競争力などの問題に直面し、大学+大学院教育は否応なしに改革を迫られている。これらを戦後レジュームからの脱却などという美辞でまとめるにはあまりにも重過ぎ、また希望も見出せない。しかし、初等からははじまる「教育」は未来の力につながっていくことに間違いなく、もしそこに惰性があったのであれば教育改革を含めて自らを律していかなければならないと感じる。大学人としてそこに一筋の光を見出したい。

蔵の町須坂をキャンパスに 産・学・官・民の連携・協働による 新たな知の創出と発信 「蔵の町並みキャンパス」

加藤 光弘

(長野県須坂市まちづくり推進部まちづくり課長)

1. 歴史と文化が集積した蔵造り等の建物の活用経緯

長野市の北東部に位置する須坂市は、現在では機械電子部品工業が発達しているが、明治から昭和初期にかけては製糸業により栄えた町であり、いち早く洋式の器械製糸技術を導入し、明治7年には最初の製糸工場が設立された。次第に工場・工女の数も増加し、大正初期には工女数が6,500人にも達した賑わいのある町であった。この繁栄時代に建てられた豪壮な建物が土蔵造りの町家であり、現在、市の中心市街地を中心に多く見られる。

昭和63年の日本ナショナルトラスト、また、平成元年の「伝統的建造物保存対策調査」において、歴史的建造物が347軒、その内、土蔵造りの建築物は200軒以上あるとの調査報告がされた。また、蔵造りで全国的に有名な、倉敷（岡山県）、川越（埼玉県）、栃木、喜多方（福島県）に劣らず、土蔵造りの建物の色彩、意匠、屋根の形などが変化に富み、非常に魅力的であること、土蔵造りの町家以外にも、明治・大正時代の洋風建築や江戸時代の寺社建築の優れた建物が町家の町並みに接した場所に残っていることなどが特徴として挙げられた。

そこで、平成5年から独自で、また、平成7年からは街並み環境整備事業補助金を導入し、これらの歴史・産業遺産の保存や町並み整備を行っている。しかしながら、経済・産業環境の変化による中心市街地の空洞化は避けられず、かつての栄華を極めた中心市街地は歩く人もまばらであり、非常に価値の高い中心市街地の歴史・産業遺産を活用した賑わいの創出をどのように行うか、新たな課題が浮上した。

2. 蔵の町並みキャンパス実施に向けた取組み

平成17年8月、産・学・官・民の協働により若者が集い交流が生まれ、21世紀を担う知の創出と発信の地とする。また、地域住民をはじめ、近隣市町村の住民を対象とした公開授業「オープンキャンパス」の実施、市民の自主学習の場とするなど、様々な事業展開を行う中で新たな都市づくりと賑わい創出を目的とする「蔵の町並みキャンパス」構想を策定し、長野市内の大学・短大・高等専門学校、企業、まちづくり団体、商工会議所、行政にて研究会、推進協議会を設立し、具体的な事業実施に向けて研究、協議を行った。



3. 蔵の町並みキャンパスの実施状況及び成果

推進協議会での協議結果に基づく事業計画を策定し、平成18年度から本格スタートした蔵の町並みキャンパスは、信州大学ほか3校が歴史的建造物や町並みの残る街区の再生設計、歴史的建造物を活用した美術展、博物館・美術館の収蔵品から生活を学ぶ課題など、延850人の参加により6事業を展開し一応の成果を挙げる事ができた。また、歴史的建造物や町並みの残る街区の再生設計では、その成果を市民対象に発表会を開催した。特に拠点キャンパスとなる旧上高井郡役所の耐震整備、事業推進に向け企業から寄附をいただいたことは特筆すべき事項である。

また、2年目の平成19年度は、事業数が9事業に増加し、学生等の参加者も延1,100人となっており、中心市街地の賑わいの創出にも一役かっている。特に拠点キャンパスである旧上高井郡役所の外構工事に際し、学生から設計案の提案をいただき、提案内容を採用した実施設計により工事を行ったことは、初めて目に見える事業成果となった。

さらに3年目を迎える今年度は、参加大学や事業の拡大を図るため、現在、大学等との事業調整を行っているが、近代化産業遺産に指定された建造物の調査研究などの新たな取り組みも提案されており、産・学・官・民の地域連携による新たなまちづくり施策として期待は大きい。



伝統的な建物を活用した街の活性化への取り組み

五十嵐 啓

(福井工業大学 建設工学科建築学専攻 准教授)

昨年、福井県建築士会南越支部が「親子でまち暮らしを楽しむ家」設計コンペを実施しました。このコンペは、建築士会南越支部や県内の大学研究室が、越前市（旧武生市）の中心市街地活性化のために行ってきた活動が基礎になり、国の「平成19年度全国都市再生モデル調査」の「先導的な都市再生活動」として認められ、その一環として実施されたものです。このコンペのユニークなところが、最終審査を公開プレゼンテーションで行い、審査員の先生方の票と市民の方の票の合計で順位を決定するものでした。「・・・チャンピオン」というテレビ番組を思わせる審査方法で、多くの市民の方が審査会場に足を運ばれ、発表者の内容を生で聴講し、審査に参加されました。

町並み保存運動は、全国で盛んに行われているようですし、福井県越前市（旧武生市）にも大変立派な町並みが現在でも残っています。しかし、近年は住民の高齢化が大変深刻な状態になり、その維持に赤信号が灯っています。この状況を至急に、少しでも改善するために、実際にそこに住んでいる住民の方や、すでに郊外に住まわれている若い世代の方に、直接分かりやすく語りかけることができる大変いい機会であると思い、このコンペに参加いたしました。我々は異分野の専門家5人でチームを作り、様々な意見を何とか提案にまとめ応募致しました。結果的には幸いにも市民の方から多くの票をいただき、最優秀賞を獲得できました。

このコンペに応募すべくいろいろな考えをまとめていく過程では特に、市民の方々が主役であるということ、決して聴衆ではないこと、更に今後暮らしていく人たちは、今既に郊外で暮らしている若い世代であることを意識しました。彼らの世代は郊外の暮らしに慣れており、町並み保存に高い意識を持っているわけではない。その世代が街中に戻り、古い町家の価値を見直し、そこに住もうという決断をするきっかけをどう訴えていくかに頭を悩ませました。町並み保存と同時に、むしろ最優先課題として、そこでの暮らして楽しいか？が、我々の中心となったテーマで市民の方に多くの票をいただいたのは大変心強く思っています。

「子宮～他と繋がるための包まれる空間～」

清水 靖子

(新潟工科大学工学部建築学科 平成19年度卒業)

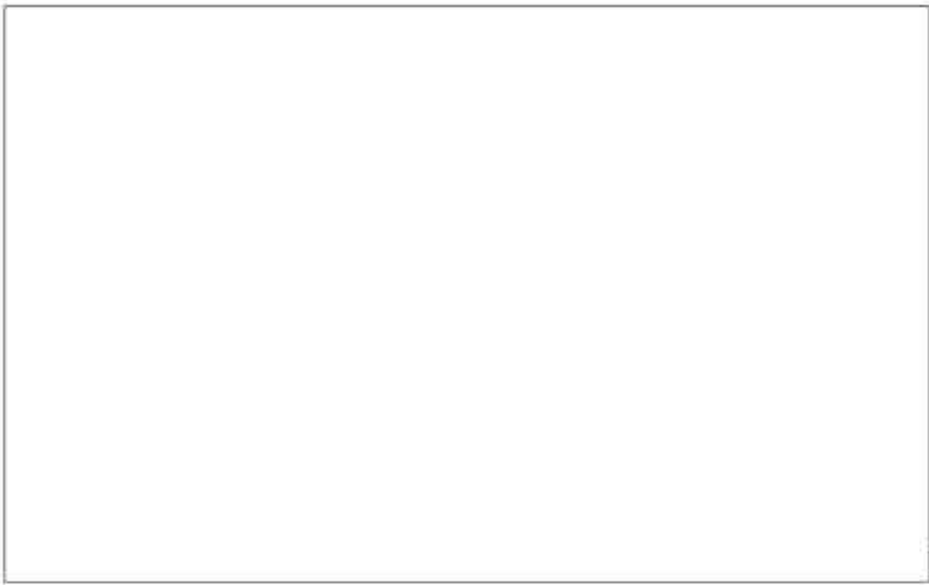
私は大学生生活の集大成とも言える卒業設計で、子宮をテーマに2年間構想を練り作品をつくりあげました。

人が生を受けて最初に体験する空間を、私は覚えていない。そこ(子宮)はきっと狭く暗く少し怖い。しかし温度や音、感触等の見えない形が存在する空間。反面、現在私たちは社会という大きな空間の中で、他と交わり合い、時に自分の居場所を見失い、ストレスを生じ、めまぐるしく過ぎる日常の中で自分が息をして脈をうっていること、生きていることの喜びや尊さを普段あまり感じられなくなっているように思える。自殺者の存在を日々耳にする現代に、自分を確認できる子宮のような空間が必要なのではないだろうか。子供が母親の胸の中に抱かれようとするように、自分という小さな個と大きな世界との不安定な関係に、自分のスケールに見合った自分だけの空間を持たせ、他との関わりや繋がりをスムーズにする。結果成長を促し、自分の形を見つけ命の喜びに祈りを捧げ、また広い世界に踏み出せる。どんな悩みを抱えていても、どんな人でもやさしく包んでくれるお母さんのお腹の中のような、そんなやさしい空間を私はつくりたかったのだ。

子宮内部は、壁に小さな個の空間がポコポコと開いており、それは壁が外方向に向かうにつれ、成長するように大きくなる。そしてその壁自体は折りの形、合掌するように2枚が支えあいながら内から外へ繋がっていく。平面で見ると母体(外)と子宮(内)が一繋がりできていることを表し、又、胎児が成長するにつれ子宮が広がっていくように、さらに壁自体をへその緒のように捉えることもできる。壁と壁の間には共有スペース、つまり他と交わるための空間が挟まれており、他の空間も内から外へ空間自体が成長していく。またそこを歩きかう人々も1人で個の空間にこもっていたが、同じ悩みを抱えてここへ来た誰かと交流することで、殻(壁)を少しずつ壊し、外側の個の空間で多人数でこもったりと、外方向へ歩を進めることで出会いを重ね、自分自身の空間を成長させていく。出会いは自分とは違う考え方を与えてくれるきっかけとなったり、何らかの心の成長をもたらしてくれる。そんなふうに空間と人が共に成長をしていく。

引きこもりを経験した私が、実際に出会いによって救われたように、他との交わりを諦めないでほしい。命の尊さを再認識してほしい願いも込めて、自殺の名所でもある青木が樹海を設定敷地としました。





「せんだいデザインリーグ2008への参加を通して」

八代 嘉則

(金沢工業大学大学院建築学専攻 水野一郎研究室)

卒業設計日本一決定戦「せんだいデザインリーグ2008」が平成20年3月9日(日)に行われました。「せんだいデザインリーグ」とは、全国から応募された学生の卒業設計を一堂に集め、公開審査によって日本一を決めるというイベントです。この活動は2006年からオフィシャルブックとして全国で発売され、私もこれを見てデザインリーグに応募したいと考えていました。

私が行った卒業設計は「アートの生まれる町」というタイトルで、金沢の街中にレジデンスとギャラリー、工房といったアートスペースを創出するというものでした。設計概要は、過剰に立てられた閉鎖的な壁に開口の密度と量、そして、連続性といった操作を与えることによって、多様なクリエーションの場と部屋やギャラリーとの関係性を作り上げています。さらに、遮断的な壁に開けられた開口の抜けや連続性を利用して、アート作品越しに別のアートやクリエーションの場を見ることができ、変化と神秘性を加えることによって、現代建築の均一な空間ではなく光と影を取り込んだ普段体験できない空間を体験できるというものです(図1)。初めての学外での審査ということで楽しみにしていましたが、会場にはすごい数の学生がいて、模型も相当の数が並んでいて圧倒されました。模型はどれも大きく迫力があってクオリティも高く、パネルやポートフォリオもみなしっかりデザインされており、豊かで楽しげなイメージがしっかり伝わってくる作品ばかりでした。結果は24位でファイナルに残ることは出来ませんでした。多くの人に自分の作品を見ていただけ、評価してもらえたということが良い経験になりました。ファイナルの10人のプレゼンテーションではみな自分の作品をいきいきと語り、とても自分と同年代であるようには思えないほど上手でした。私は人前に出て話すことが苦手で、プレゼンテーションでもまだまだ作品のエッセンスを人に伝えるといった点で劣っているということを痛感しました。

あれから数ヶ月経ちますが、ふっとした瞬間に卒業設計のことを思い出し、思いを巡らせることがあります。おそらく、卒業設計で考えたことは、これからの人生でもずっと考えながら生きていくのだらうと思います。それだけ、自分と向き合っ、友人たちと対話して建築について深く考えた時間でした。

卒業設計で最も強く感じたことは人との対話、議論がとても大切であるということです。自分が見えなくなっているもの、気付かなかったことを友人たちの指摘やアドバイスで、気付かされ、よりよい作品にすることができました。また、地方の学生は都市部の学生よりも情報量が少なく、建築家との対話や経験が足りません。しかし、地方だからこそ出来ること、考えられることもあると思います。だからこそ、貪欲に一つのことについて食い下がって多くのことを学んでいくということが大切です。それにより、都市に住む人とは一味違うデザインを生み出していかなければならないと考えています。



作品「アートの生まれる町」-1



作品「アートの生まれる町」-2



作品「アートの生まれる町」-3

「福井市下馬地区における本社ビル新築計画」

西井 祥子

(福井工業大学工学研究科修士課程建設工学2年)

福井工業大学五十嵐研究室では、学生達が頭を悩ませながら「HIGEプロジェクト」に取り組んでいます。

去年の秋頃、ある会社の本社ビルを福井市の下馬地区に新築する計画が持ち上がり、五十嵐准教授に設計の依頼が来ました。依頼主の社長は大変ユニークな方で、「学生が考えた、新しい本社ビルを見てみたい！」と、今回の設計に研究室の学生が参加できる機会を与えてくださいました。

今年の3月、五十嵐研究室から6名の学生が、会社から与えられた条件と計画敷地に、自分達のアイデアを盛り込んで設計した案を、パネルや模型、アニメーションを用いて、会長と社長にプレゼンテーションを行ない、高評価をいただきました。

現在、各学生案を盛り込んだ図面を五十嵐准教授が纏め、その図面を中心に、エントランスロビー、食堂、トイレ、屋上庭園、サイン、そして外観デザインの各担当を学生の中から設けて、具体的な設計に入っています。

その中で、私はトイレのデザインを担当することになりました。オフィスビルのトイレは、社員みんなで使う場所であり、社員一人一人が最もリラックスできる場所として、デザインを考える上で肌理細かい配慮が必要となりました。また、社長や従業員の方々からも、新しい本社ビルに対する要望書が研究室に届き、トイレについても私が今まで気づかなかったことや、意外な意見を知り、会社全体の強い意気込みを感じました。

毎週水曜日の午後1時からのミーティングで、各担当者がそれぞれスタディ模型や図面を用いて中間報告を行い、熱い議論を交わしています。時には、なかなか思うような形を提案できずに悩み苦しむこともあります。しかし、学生同士で議論を重ねる上で、少しずつですが、突破口が見えてきたと思います。6月中旬までに纏めて、社長に最終プレゼンテーションを行い、年末に着工予定なので、これから勝負だと感じています。

今回この様に、本物の物件の設計に学生が参加することは、設計を学ぶ上で本当に貴重な体験だと日々感じています。建築の知識だけでなく、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を上達させる最も良い機会に感謝しながら、プロジェクトチーム一丸となってこれからも頑張っていきたいと思っています。



「歩いて楽しいまちづくり」を目指す社会実験

松林 和彦

(表参道ふれ愛通り実行委員会アドバイザー、有限会社松林都市建築計画)

善光寺の表参道に位置する「長野市中央通り」では、道路を地域に開放して沿道と一体的に空間をつくり、まちに来やすい交通形態を考えることで、歩いて楽しいまちづくりを目的とした社会実験が行なわれています。「表参道ふれ愛通り」と称したこの取り組みは、今年もGW中の5月3日から5日までの3日間実施されました。

●とにかく出来るところからやろう

長野市の中心市街地は、善光寺を中心に門前町として発達してきました。しかしながら、よくある地方都市と同様に、住民や商店が郊外に流れ、空き店舗や駐車場が目立ち、近年では商店街やコミュニティの維持が難しくなり市街地の衰退が進んでいます。

そこで、これまで活性化対策に取り組んできている「中央通り活性化連絡協議会」では、かねてからの計画である「トランジットモール」構想をもう一度考え直そうと、平成15年より長野市とともに勉強会を始め、社会実験に取り組むようになりました。

●回遊性を高める道路空間とは何？

2004年からスタートした表参道ふれ愛通りは、今回で7回目。

今回の主な取り組みは、通過交通を減らすために、最低限バスがすれ違えることができる幅(6m)に車道を狭め、快適に歩いてもらうために、休憩場所の配置やイベントができる仮の歩道を設けました。併せて、アクセスのし易さを考慮し、バス一日乗り放題券の発行・回遊バス(花めぐり号)の運行・駐車場利用の促進などを実施しました。

イベント空間では、花をテーマにしたイベントやオープンカフェが設置されました。歩くことや距離のある長野駅と善光寺の間も、沿道を歩く楽しみを提供し、バスと徒歩を併用することで回遊性を高めることができたと考えています。実験期間中は、まちが大変賑わいました。何も実施しない同期間よりも、数倍歩行者が増えたという調査結果も出ています。

●結果は良好、課題は山積み

観光客や買物客からは、概ね良好な評価を得ているものの、まだ商店を中心とした地元からは、厳しい意見を頂いています。あくまでも将来の目標に向けた社会実験ですから、解決しなければならない課題が山積みです。この表参道ふれ愛通りが実現しても、すぐに歩く人が増えてまちが活性化するわけではありません。あくまでも、そのための手段としてスタートしたばかりです。



2008年5月 善光寺花回廊とのタイアップによる社会実験



2007年11月 社会実験の道路形態



2007年11月 パラソルで休憩する様子

壊されようとしている高岡本丸会館本館

松政 貞治

(富山大学芸術文化学部教授)

高岡市の古城公園の北西側の、市の中心部と伏木港を結ぶ新しい産業軸沿いに昭和9年に建てられた現在の本丸会館本館は、その誕生の背景、戦後の系譜、優れた建築意匠的価値にも拘わらず現在までの冷遇ぶりを観ると、「隠されてきた」名建築と言わざるを得ない【写真1】。

加賀藩による高岡城の占地は、聖なる二上山をほぼ真北に仰ぐ軸線と風水の方位などを考えて為されたと言われている。一国一城令により城が廃止された後に町衆の中心となってきた山町筋の菅野家の当主が昭和の初めに起こした高岡電燈の社屋を、高岡城の本丸のあった場所の軸線上に計画したものであり、近代化産業である電力を象徴するかのように鉄筋コンクリート構造が採用されている。分離派建築会の創設メンバーであった矢田茂が清水組に入社してからの作品であり、新しく開削された全面道路の軸を含めた三つの軸線が重なる場所性など、様々な「建築的意味」が織り込まれた力作である【写真2】。

ウィーン分離派よりもむしろドイツ表現主義やアムステルダム派の建築に影響されている。ファサード全面のほどよい凹凸の階調が品よく変化を生み出し、垂直水平と奥行きを幾重もの階梯が快活な分節を奏でている。直線的で単純な左右対称の平面でありながら、縦長窓や壁の凹凸などの同一的な部分の反復による統一性と多様性、つまり差異化を確保し、両端の部分を一層分低くした上で僅かに前に迫り出し、塊としても優雅な分節を体現している。新産業の軸線街路の左右どちらの方向から近づいても、ヴォリュームの変化や陰影のリズム感を楽しむことができた。市民は、左右から玄関の前に来るころには、自分たちの歴史的原点の一つである背後の本丸を意識したに違いない。

この建築は昭和30年から20年間、高岡市庁舎として利用された。その間に残念ながら内部は不用意に改造された。和室はなくなり1階の営業室と3階の広間の2本の円柱を中心とする大空間は間仕切りで台無しにされた【写真3,4】。竣工当時の魅力的な雰囲気を残すのは2階の旧客室のみである【写真5】。柱と共に露出された梁は、垂直ハンチや四角面棧(めんざん)が施されて僅かに漆喰の鏝絵で装飾され、ラーメン構造の率直な表現と相俟って豊かな空間を随所に生み出している。しかしオリジナルの風格や品位を取り戻すことは困難ではない。グロピウス流の典型的な近代建築である山口文象設計の黒部川第二発電所(1936)が重要文化財の候補にされる一方で、ペレとル・コルビュジエの中間的な位置づけが可能であり、装飾性からの脱却と、伝統の抽象化という両義性を持つ本丸会館は、県や市の文化財にさえ指定も登録もされていない。高岡の地霊と市民の集団記憶を持つこの名建築を、今、高岡市は解体して駐車場にするという。そろそろ建築学会富山支所としても看過できない状況になりつつあるのではないだろうか。(参考:『万華鏡』196号「本丸会館」の拙稿)



【写真1】 昭和10年の高岡電燈
(現本丸会館本館、清水建設所蔵)



【写真2】 古城公園本丸広場付近と
本丸会館



【写真3】 高岡電燈1階営業室の円柱と
カウンター付近(清水建設所蔵)



【写真4】 1階の間仕切りで隠された円
柱



【写真5】 会議室現況（旧高岡電燈客室）